

配分學說史考（其壹）

大熊 信行

第一 『配分』の語辭並びに日本經濟學の現状における用語上の
混亂について

經濟學上もつとも新らしく、そして隱約のあひだにはその成立もつとも古く、そしてもつとも重要な觀念は、配分觀念である。かくいふのは、過去二世紀に亘る科學としての經濟學のあらゆる理論的體系の批判によつて得られる一つの究竟的な結論である。ここにあらゆる學派の理論的體系と稱するもののなかには Marx 經濟學を當然包括する。それはそれひとり配分學說を獨占しえないのみならず、それひとり配分學說史のなかから遁げ出すこともできない。それはいくつもの配分學說のなかのひとつであり、代表的もののひとつであり、そしてのちに述べるごとく他の代表的なもののひとつと對照されなければならぬ。

經濟學が一箇の科學であるならば、科學には發見、發展、修正、顛覆等があるのみで、獨創はあり得ない。箇性や獨創が貴ばれるのは、文學、美術その他の藝術的分野においてである。いまや藝術的分野においてすらこのことは一つの疑問である。もしも科學の世界において箇性的なものや獨創的なものが、——すなはち個人の性格に即してのみ理解さるべきものが、何等かの價值を帯びてくるやうな風潮の見えはじめたときは、それは科學が科學たることを罷めるときであり、あるひは少くとも何等かの危殆に臨みつつあるときである。『經濟學の領域において働く人はすべて、』と Alfred Amonn 教授は、『自己の以前に又は自己の傍において成就せられてゐることに留意せずに、自己の獨自の體系を建設するといふ習はしが過ぐる十年間に擴がつて來た。かくのごとき習はしは粉碎されねばならぬ。耐久力ある學的建设は、一ダースの又はそれ以上の碩學がそれぞれ獨自の體系を建設するといふがごとき方法によつては決して生ずるものではない。』——これは一九二三年代の獨逸學界における發言である。しかるにこの發言は書物全體とともに最近日本語に翻譯され、そしてそつくりそのまま日本の經濟學の現狀に適應するやうに見える。

ここに配分觀念が新らしいとの意味は、その學說の成立または法則の發見が新らしいとの意味ではなくして、箇々別々に成立し發展してゐる諸學說を目して同一眞理（或は假說）の種々なる表現であると認める一つの方法が新らしいとの意味である。配分觀念はそれらの諸學說を或るたゞひとつの角度から理解することによつて得られたところの一箇の綜合的な觀念である。新らしいのは發見そのものではなくして、箇々の發見を統一しなければやまぬところの包括的な意識的な仕方をもつてする取扱ひそのものである。いな、かかる取扱ひは經濟學の

現状において、いまだ何人によつても試みられたことなく、今日以後に期待されなければならぬ。

配分觀念は、經濟學が科學として成立すると同時に、そして事實上あらゆる學派の體系を形成する脊柱として、存在し來たつたといつて差支ない。だがこの脊柱は、時として觸知すべからざるものとして内在し、時としては鮮かな或る法則として一體系の全面を掩うてゐる。すなはちその存在の様相に至つては、互に極端に相異し、その或るものは表面的には不明瞭であつて、それを單獨に切りはなして把握するさへ容易ではない。これ配分學說の綜合的な取扱ひを困難ならしめる第一の事由である。第二の事由は第一の事由と無關係のものではないが、その發端は一層内面的である。人々は勞働價值説と限界利用説との決定的背反を過信し、兩說綜合の一學理を認容しようとしなない。しかるにこの理解と認容となくしては、箇々の體系のなかに配分學說の潜在を看破することは殆ど不可能である。Amonn 教授は痛切にもいふ、『十二たびも同じことが、そしてさうは云つても何時も幾らか違ふことが打建てられると云ふことが問題ではなくてすべての人が同じ建物で働くのが重要なのだ。しかしながらこのとは、各人が自己の以前にその分野において働いた人々の肩に乗り、又自己と同時にこの建物で働いてゐるすべての人々と手を伸べ合ふときの外は可能ではない。ただこの方法によつてのみ、吾々の領域においてもまた他日、維持し得ると同時に完成された建物が出來上るであらう。』と。現代の經濟學がその遺産のすべてを顛覆して、全く新しい地盤のうへに、全く新しい建築物をつくりあげることが任務としないかぎり、——別言すれば、すでに出來かかつてゐる基礎建築を修理し、且つその上層を築き上げることをもつてその正しい目的とするかぎり、我等にあたへられた任務の一つは、それぞれの目的とする範圍において謬るところのない幾つもの推理

を、さらに新らしい一視角から照らすことによつて綜合的に理解することが可能ではないかどうかをたしかめてみることでなければならぬ。それに反して經濟理論のいくつもの分立と對立との理解が、その發生の根據としての立場の相異を指摘することによつてのみ簡單に性急に片付けられてしまふときは、理論そのものにたいする我等の嗜好性は歪められ遂に破壊されてしまふのみならず、いはゆる立場の相異そのものを鋭き對照にまで導いてゆくことさへ不可能となるであらう。

ここに配分學説とは、上述の意味において、勞働價值思想並びに限界利用思想を、同時に一つの角度から互に反照せしめることによつて、相矛盾する二大學説としてではなしに、相並立する二種の配分學説として綜合的にこれを取扱はうとする立場から生じたところの全く新しい名稱であり、そしてその名稱はのちに述べるやうな一定の意味内容を指示するものでなければならぬ。この新名稱は必要である。蓋し一つの新しい科學的觀念は、かならずそれを表象すべき他と紛れざる語辭を要請するからである。といつて配分といふ語辭が今日迄の經濟學に存在しなかつたのではない。それは Marx の價值論のなかにあり Jevons の價值論のなかにある。ただ敢ていふならば今日まですべての學者はこの語辭そのものに注意しなかつたのである。ここに「注意」とは、この語辭が兩者において全く同一の意味に用ゐられてゐるといふ事實への注意であり、さらに肝要なのは兩者ながらこの語辭を用ゐてそれぞれ一つの法則を説いてゐるといふ事實への注意である。そしてその法則とは、Marx においても Jevons においても、ともに勞働の配分に關する法則であるといふ重大な事實への注意である。なほさらにつけ加へてこの勞働配分の法則は Marx においても Jevons においても、ともに均衡の法則であるといふこ

と、したがつて勞働配分の均衡に關する法則が兩者によつて把握されてゐるといふ事實への注意である。この均衡をいひあらはすのに、前者は客觀主義的に勞働配分の『正しき比例』といひ、後者は主觀主義的に最終利用の均等といふ。ともに勞働配分の學說であつて、ただ一方は客觀主義、他方は主觀主義の理論をもつて、同一事物を把握するものたるにすぎない。いふまでもなくこの配分は、種々なる欲望にもつとも適應するやうに、生産諸部門にたいして合理的に總勞働を振り當てるの意味であり、舊經濟學の四分法(生産・分配・交換・消費)にはゆる分配とは全くその意味を異にし、またその理念を異にするものである。

しかるにここに不幸にも、配分の觀念は從來の經濟學において曾て獨立してその重要性を認められることなく、その用語において悲むべき無頓着を呈しつつ今日に及んで來た。すなはち配分は、英語でも獨逸語でも、舊經濟學の四分法にいふところの分配をいひあらはすと同じ語辭(distribution, Verteilung)によつて表象されつつ、何人によつてもその不便を指摘されることなく、むしろ同一語辭の二様の用法の存在することすら多くの學者の注意を惹くことなくして今日に及んで來た。このことは配分觀念の重要性が確認されずにゐる事實を告げるのみならず、その確立を妨げつつある因由である。これを日本經濟學の現狀について見るに、事情は一層特殊である。日本の經濟學は一言にしていへば西洋からの輸入物であるが、舊經濟學の四分法にはゆる分配は、最近の一二例を除く外、用語上に立派な統一の存することはすべての人の知るところである。しかるに配分に至つては、これを前者と區別せず全く同様に分配と稱するものの外、その用語に統一を見ず、『配分』『按排』『振り當』『割宛』『割振り』『分布』『配布』『按配』『按排充當』『配當』等々、殆ど列舉に暇なきありさまである。かかる不統

一は、泰西諸國において分配と配分とが同一語によつていひあらはされてゐると同様に、配分觀念の確立を妨げつつある一つの因由であるが、しかもなほ一面から見れば、原語において同一のものも意味の如何により分配と區別して譯出されなければならぬといふ用意の難多なるあらはれであり、したがつて全く無意味のものではない。今日以後の問題は、原語において同一であるもののうち、四分法にいはゆる分配の意味ならぬ distribution, Verteilung の譯語を、同じく分配とするか、それとも譯出を二様にして後者を何と一定するかの問題である。しかるに一方、經濟學の四分法にいふ分配並びにその系統に屬する概念をいひあらはすのに、最近『配分』の語辭を突然使用しはじめた學者の出でたことは、さなきだに統一なき用語をさらに紛亂せしめる原因となつた。すなはち狀態は泰西諸國に比して一層わるい。その極端なものは、從來の分配またはそれに近いものを却て配分と稱し、ここにいふ配分をあべこべに『分配』と稱する例すらある。その憂ふべき一例として土方成美博士『經濟學總論』（日本評論社版現代經濟學全集第一卷五一）を見よ。

科學的作業は自己封鎖的な獨創的作品の形成ではなく、協同的な——もつとも綿密に協同的な客觀的な理論的世界の建設である。その本來の性質が非簡性的なものであり、その非簡性的なその一般的なところに、存在の根據がある。もし一科學の分野において科學者が互に基本概念を共有することを拒否し、同一の語辭によつて同一の内容を指示することを互に忌避するならば、兩者のあひだには眞に科學的意味における論争さへ不可能である。Anon 教授が痛切にもいひあてた『新しがり屋の體系作り』が科學と文學とを穿きちがへたかのごとく、自己封鎖的な獨創の世界をつくりあげ、彼以前の研究にたいしても、彼の周圍の研究にたいしても、不當に懷疑

的な態度を装ひつつ自己の體系への外部からの検討者が全く第一歩から吟味してかからなければ検討がしにくいやうな形態において——その検討の困難は學說の精緻や深刻からくるのではなくて、ただ經濟學の基本觀念と共通性をもたぬ新語を濫造することから生ずる理解の上の面倒、さにすぎぬ——自己を護るといふこと、さらにすすんでその獨創性を主張するといふことは、科學の發達にとつて最惡の風潮である。Amon 教授はいふ、『かくのごとき習はしは粉碎されねばならぬ』と。——しかし『粉碎』されねばならぬ。かかる『新しがり屋』がかりに「ダース集まつた」とて、科學が彼等から期待すべき寄與は、ありうべくもない。科學の眞正の軌道は、彼等とは無關係に、彼等をおきざりにして、さきへすすむであらう。

舊經濟學の四分法にはゆる分配の語辭は、すでに日本に近代經濟學が輸入されて以來、幾十年のあひだ、すべての學者によつて、決定的に一定の意味に用ゐられ、したがつて經濟學の書物のなかでは、この用語は右の概念を表象する場合にのみ使用されて來てゐることはすでに述べたとほりである。科學上の重要な基礎概念がそれぞれ一定の用語によつて表象され、その使用上に統一がなければならぬといふ一事は、あらゆる科學の分野に通ずるところであるが、それは科學研究の協同性のために不可缺の條件である。このことがすべての學者によつて慎重に護られてゐる場合に生ずる直接の利益は、學術書の研究並に科學上の論争に際し、表現およびその理解における各自の勞力と時間との多大の節約が所期されるといふ點に存する。——かくも判りきつた説明するさへ恥かしいほどのことを、一言しなければならぬといふのは、右にいふごとくわが日本の經濟學の近時の風潮が、かかる發言を必要とするほど用語上に勝手氣ままな亂脈を呈しつつあるからである。その研究態度において峻嚴人

をして襟を正さしむるほどの河上肇博士さへ、その科學上の用語を理由なくして變換せられるのを見れば、わが學界における右の風潮がいかに普遍的なものであるかを知るに足るであらう。博士の新著『經濟學大綱』（改造社版經濟學全集第一卷）を見よ。そこでは四分法にいはゆる分配が悉く『配分』と化してゐるではないか。これは一體何のことであるのか。經濟學上の一基本觀念を指示するために久しく用ゐられてゐる一つの決定的な用語が、かくも無意味に——しかも實に無意味である——かくも無難作に一言の斷りもなく變更された事例が他にあらうか。もしも萬一、配分の語感が分配の語感よりも何かしら新味を感じさせるから、その方に更へようといふやうな理由で變更されたのだとすれば、その動機の新科學的にして文學的なるに驚かざるを得ない。もしまた近時分配を配分と改稱するすばらしい獨創家があるのを認め、博士もその獨創家の用法に追隨しようといふのであるとすれば、我等は啞然としていふべきことを知らぬ。

もし右の用語の變革について我等の想像を超えた何等かの理由があるとするならば、希くは博士の説明を期待したいものである。不思議にも分配を配分といひ改めること、配分といへば分配のヨリ新しき意味であらうといふぐらゐに考へることが、實に不思議にも、日本の經濟學界の風潮となりつつあるのではあるまいか。この風潮がどこから生じたかは追つて突きとめる必要があるが、いまこの風潮に囚はれた一事例として東京帝大の本位田祥男教授によつて試みられた或る評言を擧げることができる。教授は改造社版經濟學全集の構成にたいし至當な批評を加へられたなかで、特にその特殊理論が多項に分れ、それぞれ擔當者を異にするために生ずるであらう不統一を豫見し、その起り得べき極端な場合として『價格論で限界效用説を聞き、配分論を勞働價值説でやられて

は、八幡知らずの藪へ入つたやうなものである』といはれてゐる。おもふにこの言葉は、おのづからにして二種の見解を露呈する。その一つは配分とは分配のことだらうといふ至極簡單なる見解。——これが右にいふ不思議なる風潮の一事例である。他の一つは限界利用説と勞働價值説とは決定的に矛盾した學理であるといふ通俗的な見解。——しかるに配分理論はそれ自體が直ちに分配理論ではありえず、配分觀念は分配觀念とは全然別箇の獨立した新しい觀念である。この觀念は、經濟學上相對立する二大學派において暗々に通ずるところの根本思想を、新しい視角から綜合的に把握することによつて肇めて明確に打建てられた觀念であり、それ自體のなかに兩學說の均衡理論を融合しつつあるのである。したがつて本位田教授のいはゆる『八幡知らずの藪』を切りひらくものこそ實に配分理論であり、それ以外のものではない。——かく斷言するのは、私が右全集中の『配分理論』の執筆擔當者であり、そしてそのなかの私の出發點は相對立する二學說の綜合にあるがためである。

私はまづ日本學者のあひたにおける配分と分配との用語上の根據なき併用と顛倒との目に目に著しき發展にたいし一警告を發せざるを得ない。かかる用語上の亂脈が亂脈のままに放置されてゐるかぎり、配分と分配との混同と混亂とは、果てしなきものとなるであらう。我等にとつて必要なことは、第一に從來の四分法にいはゆる分配をいままら『配分』といひあらためる無意味な風潮にたいする抗爭であり、第二に配分といふ用語によつて本篇が指示しつつある一概念を表すために用ゐられてゐる澤山の語辭のただひとつへの統一である。そのただひとつが決定的にここに使用しつつある配分でなければならぬといふ根據はもちろんない。『按排』『振當』『配仲』等々、いづれでも統一さへうれば結構である。ただ我等が語辭を決定するにあたつて顧慮すべきこ

とが三つある。——その一は何がもつともよく内容を表象しうるか。その二は何がもつとも語呂において快適な響きをもつてゐるか。その三は何がもつとも他の用法との紛らはしさを免れてゐるか。おもふに『按排』または『按排充當』こそ、もつともよく内容を表象したものであり、他の用法との紛らはしさの危険を免れてゐるものである。この言葉は別に厭ふべきニュアンスもなく、耳に響いて他の漢字を聯想せしめる惧れもない。『分布』は地理學的乃至生物學的な使用からのニュアンスがあり、『配布』は音調弱く『會員ハ毎月雜誌ノ配布ヲ受ク』等々の用法に適し、『振り當』は何等かの役割の振り當てのごとくではないとしても、本來『ふり』と『あて』とのやまごことが結合した熟語であつて、さらにこれに漢字の熟語をむすびつける必要のある場合に不當である。『割り振り』もまた全くこれと同じ。『配當』に至つては直ちに『利益割當』の聯想をとまなふ。

最後に『配分』は、分配を顛倒せしめたといふ簡單さにおいて、あまりに藝のなさすぎる憾みがあるが、もともと日本語字典のなかに存在する語辭であつて、日本語としての使用上そのいづれが新しいかは不明なほどである。語感においては『按排』について鋭く且つ重味を有するものである。この兩者を比較するに、たしかに『按排』はもつともよく内容を表象するものであり、合理的な諸行動の意識的、統一的過程が指示されてゐるが、ただそれが或る數量の取扱ひであるといふことを表象する一點において幾分缺けるところがあるやうに感じられる。これに反して『配分』は、すでに『分』といふ二字のなかに數量的なものを聯想せしめ、殊にもつとも重要なのは、すでに總量の豫想を内含してゐるといふ一事である。配分には期せずして總量の前提がある。この一點こそ、他のすべての用語をあきらめてこの一語を採らしめる最後の理由となりうるのではあるまいか。しかも配

分觀念を明かにするために當然必要とされる附隨的な諸概念を表象する熟語の構成にあたつても、この一語は語感においてもつともすぐれたもののやうに感じられるのではあるまいか。熟語の構成とは、いはく『配分者』『配分素材』『配分總量』『配分過程』『配分比率』『配分量』『配分部門』『配分起點』『配分期間』『配分均衡』等々。

しからば日本經濟學におけるこの用語例の歴史は奈邊まで辿りうるであらうか。他の多くの問題に關する場合とひとしく、我等はこれを福田德三博士の舊著にまで溯らなければならぬ。おもふに博士の諸著は、日本の經濟學における科學的情熱の最初の火華であり、源流であり、出發點である。實にこのことは小篇配分學說史の序說における一用語上の問題においてすら、除外されうるものではない。我等は福田博士の『經濟學講義』において、すでに分配と配分との用語上の意識的な區別の最初の樹立を見る。この區別はいふまでもなく Marshall の原語における distribution が、二様の意味を有するといふ事實からして、その用所によつて二様の譯出を試みつつ讀者にまみえようとの用意に出られたものであるが、それがために博士の工夫せられた語辭こそは、すでにさきに掲げた『按排』であり、そして殊に注意すべきは、この『按排』が、その見地によつて支出の場合たると取得の場合たるとにより、一は『按排配當』他は『按排收得』といふごとく綿密にも甄別せられた用意である。爾來かかる用意は經濟學の分野において再び見ることをえずして今日に及んだ。しかもなほ興味の盡きざるものは、右の『按排』とともに、その同義異語としてただ一度『配分』といふ語辭が使用せられてゐる事實であり、本篇の筆者はこれをもつて日本經濟學における『配分』の——分配と意識的に區別された意味における『配分』の——最初の用語例としてここに銘記せんと欲するものである。法學博士福田德三著『經濟學全集』第一集四九五頁を見よ。

Marshall の『經濟學原理』の譯者大塚金之助教授は、その最初の舊譯以來、原語に distribution といふものうち、配分を意味する場合はこれを配布、振當等の語をもつて譯出し、分配と截然區別するの用意を執られた。さらに近時に至つて配分と改譯し、全卷に統一をあたへられたことは、もつとも肯綮にあたる。譯書の索引へ新たに配分觀念のすべてを抽出するの勞を執られたごとき、まさに一つの貢獻である。本篇の筆者は、慮らずも一九二二年十月、經濟學研究の發端において、この科學の全領域における配分觀念の無比の廣汎性を發見したと信じて以來、これを分配と區別して表象するために、配分といふ用語を擇るのを適當と感じ、この問題に關する最初の思索を直ちに小さな體系——その體系がすなはちさきの小篇『配分原理』である——と諸學說の批判とにまごめあげ、恩師福田先生にお送りしたとき、その幼弱な論稿の表題は『生産力配分の原理』であつた。この配分といふ用語は何等の考證なしに、おのづと念頭に泛んだものにすぎなかつたけれども、いまいちしておもへば、この用語は當時すでに先生の『經濟學講義』のなかに存在したこと右に述べるとほりであつて、かかる無意識の使用は、この典據から來たものと解するを至當と感ずる。

もし本篇にいふ配分觀念が將來幸にして學者の認容するところとなるならば、この綜合的な觀念を表象するための科學上の用語が、再び混亂と顛倒とにおちいることなく、決定的に配分となるであらうことを切望せざるを得ない。すなはちその反面には、ここにいふ配分觀念以外のものを表象するのに同一用語を使用することを封ずることの意味をふくむのである。一つの科學が箇々の科學者によつて別々に封鎖的に建設さるべきものであるといふ考が、非常な謬見である以上、およそ科學者は科學の傳統的用語を慎重に取扱ひ、その用語例を無闇に破壊する

をもつて、科學研究の協同性にたいする一つの攪亂であるといふことを互に承認し、互に誠告することが必要ではあるまいか。これ經濟學をして、多數のではなく、眞に一箇の科學たらしめ、過去および現在の科學者たちの協同の成果として、これを次ぎの時代におくるために、すべての研究者が執らねばならぬ唯一の態度ではあるまいか。泰西學者のあひだに、分配と配分との兩概念の用語上の區別が、工夫されることなしに今日に及んだといふ事實は、一つには兩概念が全く互に獨立した概念であつて用語を同一にするとも誤解に陥る憂ひは存在しないといふ心強い事實を證明するともいへるが、一つには用語選擇上の彼等の怠惰であるといふこともできるであらう。——その反對の一例として現に Ricardo のごとき、右の兩概念の表出に二つの用語を使用するだけの用意を怠つてゐないことは、のちに述べるごときである。——また最後には、右の事實はさきにもいふごとく、配分觀念の重要性が確認されてゐないといふ事情にもとづくのであつて、よしたとひ今後本篇にいふごとき総合的な配分觀念が認容せられるにしても、いまだら distribution, Verteilung 以外に、他の語辭を使用するごときは、恐らく望むべからざることであり、したがつてその觀念をいひあらはすためには、右の語辭に何等かの語辭を結合せしめるといふ方法を執るよりはかはないものであらう。これを思へば、すでに分配と區別された『配分』その他の語辭を有し、ただその統一を須つのみである日本經濟學の現状の方が、用語上において一步泰西に先んじ、且つよりよき便宜を永久にもつものであるといふも決して過言ではない。この發端はすなはち福田德三博士の著作のなかにあるのである。

Karl Marx のごときは、のちに述べるごとく、配分觀念の確立にもつとも寄與するところの多い學者である

が、不注意にも配分と分配をともに「Verteilung」と稱したがために、彼の研究の比較的初期に屬する作品においては免るべくもない混亂が仄見えてゐる。たとへばその『經濟學批判序説』の第二節『分配、交換、消費に對する生産の一般的關係』（マルクス『經濟學批判』河上肇閣宮川實譯二七—二九）を見よ。その混亂については、本篇の第四節が簡單に指摘する。

この點においてもつとも賞讃に値するものは、David Ricardoである。彼の研究の中心問題は『分配を規定する諸法則』の確立であつた。したがつて distribution の語義は經濟學上唯一つであり、それは四分法にいはゆる分配である。彼はいふ、『土地の生産物——勞働と機械と資本との結合投下によつて、土地の表面から取得される一切のものは、共同社會の三階級の間に分割(divide)される。土地の所有者、耕作に必要な Stock または Capital の所有者、およびその勞力によつて土地の耕される勞働者がすなはち是れである。だが社會發達の異なる段階においては地代、利潤および賃銀なる名稱のもとに、これら諸階級のそれぞれに割當(alot)てらるべき土地生産物の全比例もまた大いに異なるであらう。そしてそれは主として土壤の現豐度、資本の蓄積と人口と、および農業上に用ゐられる熟練と工夫と用具との如何に依存するものである。この分配(distribution)を規定する諸法則を確立することこそ、經濟學における主要問題である。』と。かくいふ Ricardo がたまたま配分を論すべき場合にあつたて分配(distribution)といふ用語を完全に避けたほど至當なことはいふ。

配分の觀念は經濟學の歴史とともに古く、恐らく十七世紀の英吉利人 Sir William Petty にはじまり、佛蘭西人 Boisguillebert においてもつとも明確に把握され、その Benjamin Franklin, Sir James Stewart を經て

Adam Smith に至る。Adam Smith においては、競争による需要供給の適合、生産消費の均衡に關説するすべての推理のなかに、その觀念は普遍的に内在してゐたといふべく、(配分理論は配分總量の想定から出發するが、『諸國民の富』の冒頭第一行にいふところの『各國民の年々の勞働』はすなはちその配分總量でなければならぬ。)この觀念は徐々に明確な形態を執り、遂に Ricardo に至つて恐らくはじめて『原理』の名をもつて呼ばれたのである。實に一つの觀念が明かに意識の表面にあらはれたときは、すなはちその觀念が名稱を必要とするときであつて、Ricardo はいみじくもこれを『資本配分の原理』(the principle which apportion's Capital to each trade)と呼んだ。彼の主著第四章を見よ。——『我々が大都市の市場に目を注いで、趣味の變易又は人口の増減から起る需要變動の様々な事情の下に於て、内外貨物供給が、その要求せらるゝ數量に於て規則正しく行はれ、而かも供給の過剰より起る飽充といふ結果をも、供給が需要に及ばぬ爲めに起る非常なる價格騰貴といふ結果をも、頻々惹き起こしては居らぬことを觀察すれば、我々は資本を各職業に正しく配布する(apportion)の原理が、一般に想像せられてゐるよりも更に其作用を遑うしてゐることを容認しなければならないのである。』(岩波文庫小泉信三譯『經濟學及課税之原理』七〇—七二)

ここに配分する apportion といふ語が小泉教授の譯においては同一章中で一回は『分布』、一回は『配布』と譯出されてゐる。同一譯書中にさへあらはれる譯語のかかる不統一は何を語るか。堀經夫教授の舊譯書においてはこの配分 apportion は『割當』と譯出されてゐるが、同一譯書の同一章中にすら譯語の統一のないとき、二三譯書間における不統一のごときは驚くにあたらないであらう。我等はただここでは配分觀念が Ricardo によつては

じめて明快に確立されたこと、そして彼はそれを分配の觀念から完全に區別するために *apportion* という用語を使用したことを指摘し、この點に讀者の注意をもとめるをもつて満足しなければならぬ。

この配分觀念は Ricardo から Marx に至つて極めて明確な、徹底的な形態をとつてあらはれたが、不幸にして彼がそれをいひあらはすために用ゐた語辭は、さきに一言したごとく、四分法にはゆる分配と同一語辭たる *Verteilung* であつた。これ Marx における配分觀念の印象を一般讀者から掩ふところの最大の障礙である。わが日本の Marx 翻譯者達は、原語の *Verteilung* を譯出するにあつて、その用所における語義の相異を吟味することなく、千遍一律に分配といひ、しからずんば配分といふ。その語義の如何は箇々の場所においてよろしく讀者の判斷に放任すべしとの意圖にいつるものか、あるひは譯者自身が配分と分配との甄別に關する認識を全く缺くにもとづくものか、そのいづれであるかは十分確かではないが、確かなことはただその結果として多數の讀者がいつまでも配分觀念の把握をさまたげられてゐるといふ事實のみである。

第二 均衡思想としての二つの配分學說の對立について

ここに配分學說とは何をゆびさすか。

すでに述べたごとくその成立は經濟學の歴史とともに古い。いな、それは經濟學の成立と同時にである。經濟學が科學としての體系をえたときと、配分學說が成立したときとは、まさに同時である。なにより同時にである。

か。配分學説は均衡説であり、そして經濟學の體系はこの均衡思想なしに形成されることをえなかつたからである。經濟學上の二大學派は、ともにこの配分學説を脊柱することによつて、その理論的體系を形成したのであり、また現に形成しつゝあるのである。いかに舊き經濟學者の體系といへども、いかに新しき經濟學者の體系といへども、この脊柱なくして形成されてゐるものはない。實に脊柱はただ一つであるが、或る學者は殆ど無意識にこれを體系の内面に隱蔽し、或る學者はもつとも意識的にこれを體系の表面に露呈し、これに種々なる異色を附與することによつて、その本質の同一物たることを掩ひつゝあるがために、すべての人々は、——かくなしつゝある學者自身すらも、同一事物が種々異なる方法において把握されつゝあるにすぎないといふ一事を發見しない。經濟學の基本的體系は、いづれの學派においても價值論である。したがつて配分學説は事實上價值論のなかにいつも存在する。また價值論否定者、價值説無用論者の體系においては、——それが體系らしきものを有するかぎり、かならずその體系の根柢において、すなはちその理論の出發點において、露出された一つの配分學説の定立を排除しえない。その適例として Lieftmann の限界收益均等法則、Cassid の欲望充足均等法則を注目せよ。價值學説は通俗の見解において二大學派對立の歴史をもつ。この二大學派は太だしく様相を異にする二つの配分學説を支柱とすることによつて、おのおのの體系を形成してゐる。一方はただ暗黙のうちに配分學説を内含し、あるひは極めて簡單に前提することによつて、その独自の價值理論を構成し、他方は却てその價值理論の究竟的到達點として、一つの配分學説を意識的に構成しようとする。勞働價值思想はその客觀的な價值學説の出發點においてすでに配分均衡を前提し、均衡そのものの內面的分析をいささかも試みようとしなない。限界利用思想はこれに

反し、主觀的な價值理論の到達點として配分均衡を把握し、均衡そのものの内面的分析を遂げようと企てる。一方の出發點であるところのものが他方の到達點であり、そして後者は前者の出發點を分析すべきものであるのに外ならない。その見事なる科學的分析は本來の性質において勞働價值思想を排撃しうるものではなく、ただその根柢を深めうるのみ。——これを根本的に排撃しうるものこそ、この學派の妄想のアルファにしてオメガである。

しかも兩學派の非本質的な對立は、理論を超えた他の事由によつて鋭くも誇張され、この誇張は双方の側においてますます激しく強調されてゐる。注意すべきは、この誇張が決して一方の側のみにあるのではなくして、双方の側にあるといふ一事である。社會科學の階級性に關する論議が、今日ほど不當に今日ほど不必要に諸學說の理論的關聯性を隱蔽し、ありうべからざる遮斷を諸學說のあひだに設けようとしたことは前後にない。かくのごとき科學的蒙昧が社會主義學者の側につづくかぎり、Marx 經濟學の根柢は、いつまでも十九世紀中葉における英吉利經濟學の理論的内容とさまで異なるところのない内容のままに固定し、その基礎的理論のより新しき展開と、より鞏固なる組織とは、期待すべくもないであらう。Marx 經濟學の現狀における・かくも膠着的な・かくも籠城的な舊理論の墨守は、Marx 自身の方法と矛盾したものではない。Marx 經濟學の發展は、かならずしもHilferding 的方向のみにあるのではなくして、その逆に基礎理論の深化もまた疑もなく發展の一方向でなければならぬであらう。——今日でなければ明日、明日でなければ明後日においてなりとも、このことは Marx 學派の人々によつてかならず顧みられる時が到來しなければならぬ。

いま均衡思想としての二つの配分學說の歴史的對立を明かにしようとするにあたつて、まづ第一に價值學說史

上對立する二大學派ありとの通俗の見解をかへりみ、それと同時に、かかる見解を漠然と執ることから出發して法外なる提言をなす『ブルヂョア學者』の典型を例舉し、その解決の方法がいかに突拍子もない方向をさし示してゐるかを注意し、それらの方法と本篇の方法とがいかに縁遠いものであるかといふことを、まづ對照的に讀者に印象せしめておくことの必要を感じる。我等がこの目的で擇まうとするのは、哲學者左右田喜一郎博士の價值論の一節である。博士の莊重な哲學論文は次ぎのごとくにはじまる。

Herklit及びXenophonの斷片的立言は暫く措いて問はず價值を學說の對象として取扱ふに至つたのは他の諸學問に於けると同様アリストテレスの昔に始まる。爾來Kirchenväterより中世のScholastiker (Alb. Magnus 及 Thomas d' Aquino等)を経て文藝復興期及啓蒙時代の後を受け十九世紀を通じて今日に至る上下三千載に亙り甲論乙駁せらるゝに不拘價值論は未だに確然たる歸趨を見出し得ざる問題の一である。他の未解決の諸問題に於けると同様に價值論に於ても種々の貢獻をなす學者にして價值論に於て限りなき困難に遭遇すること自覺し且之を除却せんとして一の新しき体系を建設せんとするに決して頭腦の鋭敏舒適の明快を示さずと云ふではないが、此の困難を自覺し之を除却するに急にして何故に價值論には此の如き困難が横はつて居るかの根本問題に想到するものは殆どない。價值論の最も深き病根は恐らく茲に存する、我等後進の學徒が價值論に於て何等かの言をなさんとするものは先づ出發點を茲に求めて根本的に價值論を考究する態度を避けてはならぬ。

しかり、『何故に價值論には此の如き困難が横はつて居るか』とは、博士の言のごとく學問上まさに根本的な疑

問である。これにたいする博士の解答は次ぎに掲げるとほり駭くべき方向を指すものであるが、かかる問題にたいしては Karl Marx のごとき學者もまた非常にはやく殆ど豫言的に一解答をあたへてゐるまいか。ここに豫言的とは價值論上のいはゆる『混沌』が彼ののちに到つて愈々その度を加へつつあり、そして何故にかかる『混沌』が持續し發展しなければならないかといふ疑問にたいし、彼の言葉が依然として一解答をあたへ得るとの意味である。したがつて何故今日においても左右田博士のごとき哲學者によつてまで、この問題が取扱はれなければならないのであるか、——なぜ『未定稿價值論の一節』などといふ莊重な哲學的長篇論文が、經濟學上の價值問題にまで參加しなければならないのであるか、といふ『根本問題』にたいしても、Marx は豫言を遺してゐる。博士の研究がいかに表面的には『混沌』を芟除しようと企ててゐる科學的努力のごとく見えやうとも、事實においてその『混沌』を途方もなく倍加し擴大し發展せしめるどころの一つの運動以外の何ものでもないといふことは、次ぎの一節によつて明かとなるであらう。――

價值現象には價值を認むる主体と價值を認めらるゝ客體と其の主客兩體との間に價值を認めらるゝ關係の存在とを必要とする。即ち價值を認むる主体が一箇の要求を持して對象に向ひ其の對象が其の要求を充たすに足るべき可能性を有すと主体に認められ、而して評價主体の要求と其の對象が此の要求を充たすこととの間に何等かの意義に於て一定の障礙あることを要する。古往今來或は興り或は倒れたる幾多の價值學說の連續より生じたる Neumann の所謂 “Das Chaos der Verfassungen” の中にありて退いて靜かに考ふるときは、此の統一なき幾多の經濟學說も或は評價主体を力説する

主觀價值説 (subjektivistische Werththeorie) か或は評價客體を力説する客觀價值説 (objektivistische Werththeorie) かの二を出でない。此の現象は甚だ深い哲學上の根據「」を有する。認識論が認識の主体と認識の對象とを前提とし、其の主客兩體の間にある一定の障礙を *Werk nüssig* に除却する處に認識の經過と成果とを認むると云ふ事實から、認識主体の側を主として力説する *Idealismus*, *Rationalismus* と認識の對象の側を主として高調する *Realismus*, *Empirismus* と對立することに思ひ及ぶものは、價值論に上述の二派あると云ふ事實から逆行して、價值論が認識論の一部として取扱はるべく、従つて認識論の有する困難を共同に負ふと云ふことを容易に「」發見するであらう。」

經濟學上のあらゆる價值學説が要するに『評價主體を力説する』ものと、『評價客體を力説する』ものの二つに歸着するといふごとき見解が、一つの概括論として科學的意義をたもちうるやいなや。――箇々の經濟學説の實體について具さにその理解を遂げたほどの人は、かかる見解そのものが何等科學的根據なきものであるといふ意見において一致せざるをえないではあるまいか。況んやかかる見解から『逆行して』、價值問題が認識論の有する困難を共同に負擔するといふことを『容易に(!!)發見するであらう』などといふ歸結に至つては、恐らく科學者としての經濟學者中、これをもつて眞に價值問題の本質を解する人の發言なりやいなや疑はぬものはないであらう。我等は左右田博士の研鑽そのものを全然無意味なりとするものではない。ただ問題が我等の價值問題に關するかぎり、我等は博士から何事も學びうるどころなしといふにすぎない。『經濟價值とは何ぞや』式の問題提起者についても、このことは全く同様である。かかる出發點に立つかぎり、華々しき獨創はすべての研究者の腦裡か

ら湧出きたるであらうが、そのやうな獨創は我等の科學とは無關係である。だから左右田式方法に隨つて經濟學の價值問題に接近しようとしつつある讀者があるならば、希くはまづ本篇の目的と方法とが、全然それとは對蹠的な位置にあるといふ一事を心付かれるやう、また左右田式方法をもつてすれば、さきの小篇『配分原理』は一の價值學說として、主觀客觀、いづれの學派に歸屬せしむべきかといふ問題に決定的な答をあたへることなしに本篇のごとき立場を批評することは無意味であるといふことを感知されるやう、希望せざるをえない。——かかる言葉は、いまだ無用のやうであるが、左右田博士の方法なるものに關して學生時代から懷いてゐる筆者の疑問と不信との一端を、價值論にかかはらしめてここに一言することは無意味ではないやうにおもふ。

配分學說が古代希臘の哲學者や中世教會法學者の教說のなかに、その最初の端緒をもとめうるものではない。それは經濟學が近代の一科學として成立の端緒についた十七世紀すなはち Sir William Petty 以來の經濟學說のなかに、その思想の最初の萌芽をたづねうるものであり、そしてその發展は十九世紀中葉以後 Karl Marx に至つてその一極點に到達したのである。しかるに一方配分學說は十九世紀の中葉、H. H. Gossen によつて、全く新しい視點から展開されはじめ、それは舊學說とは全然無關係の様相を呈しつつ次第に發展して遂に今日の一般經濟學を形成するに到つた。それは一言にしていへば Marx 經濟學と對立するところの『ブルジョア經濟學』である。Gossen によつて新たに發見された配分法則は、それとは異なる様相においてすでに Ricardo のなかに儼存してゐる。にもかかはらず、すべての經濟學者のあひだには、——社會主義の側においても、反社會主義の側においても、この兩學派における基本觀念の內面的關聯性を指摘することを憚り、飽くまで兩學派の對立を本質的

なものに見せかけようとする無意識的および意識的努力があるやうに見える。社會主義學者の側におけるその代表的なものは、N. Bukharin である。その著『金利生活者の經濟學』を見よ。

一體すべての學者は事態の眞相を知りつつ故意にかかる僻見を執らざるをえないのか、それほごまでに經濟學の階級的性質は意識的に露骨なものであるのか。——王様が裸であるといふことはすべての人民が目撃してゐる、だがそれを口走つたものが唯一人の少年であつたとすれば、對立する兩學派の理論的脊柱における内面的關聯性を提言することは、かかる少年の發言にも均しい愚舉にすぎないのであるか。果たしてさうとすれば、近代經濟學の全史を配分觀念の發展史として綜合的に理解しようとする本篇の企ては、もつとも時宜に適せぬもつとも馬鹿正直なおせっかいな——Bukharin の言葉を用ゐれば『有害な』(！) 企てであらうかも知れぬ。この立場は Marx の商品分析を目して完成されたものと認めることを肯んぜず、彼の科學的分析もまた或る限界において挫折してゐることを指摘せざるやまぬものである。かかる立場にをる以上、本篇の筆者は經濟學における理論的非階級的性質の一面を論究することにおいて、現今普通のマルキシストと志向を異にするものであり、そして配分觀念の綜合的把握は、事實においてかかる立場からのみ可能であることをみづから立證せんと欲するものである。

すでに述べるごとく、配分觀念は對立する二大學派において、互に全く相異した様相において別々に發展し、兩者のあひだには何等の内面的關聯性も認めえないものと考へられて來た。いな、兩學派の生成をそれぞれ配分觀念の發展として考察するといふごとき觀點そのものがいまだ曾て打建てられたことがなかつた。しかるに Ricardo

においてすでに彼の思想の表面にあらはれた『資本配分の原理』——これは同時に労働配分の原理である——は Marx の注目をうけて『哲學の貧困』に引用され、ここにおいて極めて明確な、徹底的な形態があらはれるに至つてゐる。すなはち彼はこれをもつて労働配分の法則となし、この労働配分は社會的生産のいかなる形態をも貫徹して作用するところの均衡法則であると認めたのである。それは社會のあらゆる欲望に適應する種々なる生産部門にたいし、社會の總労働が必然的に『止しき比例』において配分されてゆくといふ合理法則であり、したがつてその本質において非發展的な非歴史的な自然法則である。この法則は社會的生産のいかなる形態からも廢除するをえないものであり、かへつてそれらの諸形態こそこの法則の作用によつてはじめて一つの統一性と總體性を得ることのできるものである。すなはちそれは Marx においては、自然經濟、交換經濟、および共產經濟（計劃經濟）等、およそいかなる社會的生産をも貫徹して作用するところの平均法則である。いな Marx はこの法則を社會的生産のみならず、實に孤立人の經濟の想定の中からも發見するに至るのである！

いかにも Marx は、はじめ孤立的生産をもつて相手なき言葉といふにひとしき一つの『背理』であると考えた。（『經濟學批判』）だが、彼はつひにロビンソン・クルーソー經濟學を『資本論』のなかに導入することをみづから禁じえなかつた。彼は何のために商品論のなかにロビンソンを誘ひ込んだか。もつとも單純簡明に『價值のあらゆる本質的な規定』を説明するためには孤立人の生産を想定することが必要であつたからだ。なぜ孤立人の生産を想定することが『價值のあらゆる本質的な規定』を簡明に説明するゆゑであるか。諸生産における總時間配分の均衡關係がその場合においてもつとも單純に理解され得るからだ。すなはち『價值のあらゆる本質的な

規定』は時間配分のなかに存し、そしてこの時間配分は孤立人の生活においてすでに想定せらるべき性質のものだからである。配分法則は孤立人の生活を支配する。Marxはこれを社會的生産の歴史的形態をとほして發見したとはいへ、理論的には孤立人の生活をも支配する均衡法則として認めざるをえなかつたことは明かである。おもむに Marx が孤立人の想定のみで、その生産における時間配分の均衡法則を認めるに至つたことを、H. Gossen の課題に接近したことは前後にない。Marx における配分關係の分析が惜しくも挫折した一點こそ、とりも直さず Gossen における配分關係の分析が展開する一點である。それこそはまさに間髪をいれざる一點であり、主觀・客觀兩學說の鼓動が脈々として相搏つ一點である。

Gossen のいはゆる第二法則は人間行動の法則である。その行動こそ配分である。すなはちそれは配分法則である。この法則は、種々なる享樂にあてらるべき時間量が限定されてゐるとき、その限定せる總量を、享樂諸部門のあひだに、いかなる關係のもとに配分すべきかの問題に答へようとするものである。これを逆に Marx に問ふならば、彼は明快に『正しき比例』においてと答へる。『正しき比例』とは配分素材の客觀的總量を各部門へ配分する正常比例の意である。この正常比例はすなはち均衡的比例である。さらに『正しき比例』は何によつて決するかと Marx に問へ。彼はこれに應じてただ一語『利用上の效果』(Nutzeffekt)と答へる。——だが、もはやそこまでである。(註) この Marx の限界點を起點として、Gossen の法則は『利用上の效果』そのものを分析はじめる。すなはちその結果として箇人の欲望充足における内面的規律性が展開されてゆくのである。Marx においては各部門に配分されるものの客觀的數量における正しき比例が問題の中心であり、Gossen においては各部門

に配分されるものの各限界單位における主觀的な満足増量の均等が問題の中心である。一方は客觀的な正しき比例、他方は主觀的な限界均等が、それぞれ意識されてゐる問題の中心點ではあるが、事實において配分の正しき比例は配分の限界均等を證明し、配分の限界均等は配分の正しき比例を證明するものたる以上、この二つの表現は、疑もなく同一事物を異る兩面から把握したものに外ならない。すなはち兩者ともに配分を論じ、その配分均衡はいかにして得られるかを解明するものである。されば注意せよ、配分は必ず均衡の觀念を内含する。

配分觀念はすなはち均衡觀念である。經濟學の全史はこの均衡觀念の發展史であるといふことができる。近代經濟學の發端においてすでにこの均衡觀念は漠然たる形態をとつてあらはれたが、それが取扱ひ易い一箇の學理として把握されるに到つたのは、公平に見て主觀學派の功績に歸すべきものである。主觀學派はこの均衡法則をまづ一箇人の生活秩序のなから明確に把握し、いはば經濟的有機體の細胞的存在たる各箇人のなかに、經濟的世界秩序の因子たるものを發見し、且つ表現したのである。經濟的世界の理論的理解において、配分均衡の觀念はまづ一應各箇人の經濟生活の內面的完了性を解明するために不可缺の道具となるのであるが、經濟學の理論的展開は、たとひ後段において箇々人の內面的完了性が否定され、總體における一因子としての箇人の、他のすべての因子との相互依存性が力調されるに到るとも、その説明の最初の階段においては、有機的社會的均衡を組成する細胞的因子としての箇人の內面的均衡性が、一つの遊離的方法によつて詳論されなければならぬのである。Gossen にはじまる主觀學派は、この箇人の內面的均衡性を分析するうへにおいて重大なる貢獻をわが經濟學のうへになし果した。この貢獻を否定してはならない。

だが主觀學派にさきだつ古典學派（かりに Marx を含む）は、社會的生產形態そのものの外面から、もつとも大きな外面から、この均衡性を客觀的に明確に把握した。この均衡性の基本的因子を各箇人の内部にまで溯つて發見することは、同學派の敢て試みようとしたところではないが、しかも同時に同學派は、この企てを否定すべき何等の根據をも有するものではない。Marx のロビンソンを支配する箇別完了的な均衡法則は、商品生產社會においてもまたその各成員のなかに何等かの様相において發見されなければならぬ。社會の總勞働を一定の比例においてあらゆる生産部門に配分し、そして生産關係に一つの總體性と統一とを附與せねばやまぬところの自然的にして合理的なる均衡法則は、その成立に不可缺の基礎的因子として、社會の全成員における箇別的な均衡性を豫想せざるをえない。Marx の商品分析が、決して完成されたものではなく、中途半端なもの、さらに發展せしめらるべき何ものであるといふのは、この見地からいふのである。彼の科學的分析が或る一點で挫折してゐることが明かとなつたとき、その一點をつきとめ、その一點から出發して、これを正しく發展せしめることは恐らく科學者の任務であらう。この仕事のために他の學派の新しい分析法——それは必ずしも主觀主義的な限界利用概念を必要とするものではない——を採用することは、いささかも忌避さるべきではない。にもかかはらず Marx 經濟學の現狀において、かかる試みは殆ど夢想にものぼらざるところであり、もし私の理解に謬りがなければ、わづかに高田保馬博士が『一つの感想』と題する東京朝日紙上の一文において、この一點をするごく示唆せられたことがあつたのみである。

ここに他の學派の新しい分析法とは、數理派をふくむ主觀學派の方法を指す。この學派に屬する殆どあらゆる

る學者の基礎的觀念は配分均衡である。この配分均衡は彼等においてはその主觀主義的様相として、限界利用均等法則、限界餘剩均等法則、欲望充足均等法則等々の名において説明され、おほむね各箇人の消費經濟における內的秩序性の分析をもつてその適用の出發點とする。ゆゑに主觀學派の發展史は事實において配分觀念の——均衡思想としての配分觀念の——發展史であると認むべきものであり、また同學派に屬する代表的な諸學者の體系を比較研究せんとするにあたつては、この配分法則の適用がそれぞれいかなる範圍におよび、いかなる限界にとどまつてゐるかといふことが、その企ての主要なる視角とならなければならぬであらう。同時にそれはこの學派の發展をもつて配分學說の一特殊形態の發展と目する立場にとつて、缺くべからざる視角である。我等は配分學說の新しい一形態としての主觀學派の系統的發展を辿らうとするにあたつて、まづこの學派のいはゆる均等法則なるものが、配分法則の主觀主義的様相であるといふ一事をつきとめ、しかるのちに、この主觀主義的なものが漸次客觀主義的に轉向して今日に到るまでの、つまり *Gustav Cassel* に到るまでの、發展を具さに辿らなければならぬ。

この目的のために、すなはち配分學說の一系統的發展の舒述のために、我等が取り残してはならぬところの學者の中には、いかに最少限度にせよめようとしても、*Gossen*, *Jevons*, *Menger*, *Böhm-Bawerk*, *Wieser*, *Walras*, *Pareto*, *Marshall*, *Clark*, *Fisher*, *Liefmann*, *Cassel*, *Schumpeter* 等々の人々が數へられなければならぬであらう。これらの諸學者の著作について一々直接に研究をすすめることは、到底本篇の筆者のごときものの現在の力によぶところではない。その學說史的舒述が完成された場合の態様がいかなるものになるであらうかさへ、いまは

想像もおよばない。Thünen や Cournot が右の發展史のなかでいかなる位置を占めるであらうかさへ、いまは決定的な判斷をくだしがたいにもかかはらず、我等の思索が當面しそして執らざるをえなくなつた現在の視點は、かかる新しき學說史の成立の可能とその必要とを示唆してやまないのである。

そこで配分學說史は二部に分れる。第一部は Karl Marx に到つて一應完成したと認むべき客觀的社會的配分學說、第二部は Gustav Cassel において一つの頂點に達したと認むべき主觀的並びに客觀的箇人的配分學說。——後者の頂點においては、すべて主觀的箇人的なものが、客觀的社會的なものに轉化し、全體系がこれまでの主觀學派から離脱したかのやうな相貌さへ呈してゐる。だがそれは單なる外貌にすぎず、その全體系を支へつつあるものは疑もなく『欲望充足均等法則』であり、そしてこの法則がまづ消費經濟の箇人的秩序性を分析することによつて全體系の端緒をひらく手順において、何等以前の學說と相異るところあるを見ない。均衡觀念はそれ自體のなかに限界利用總利用等の概念を内含することなくして純客觀的に、立派に、成立しうるものであることは、たとへば Marx の學說がそれを證明する。だから Cassel 等が主觀學派の限界利用說を拋棄して、しかもなほ均衡理論を形成しえたときは何等異とするに足らぬ。注意せよ、彼は限界利用概念を棄てえたけれども、Gossen の第二法則を棄てえたのではない。彼の『欲望充足均等法則』は Gossen 法則以外の何ものでもない。たとひいかなる新名稱を冠して用ゐるとも、要するにそれは均等法則であり、そして見よ、その均等法則の説明に必ず用ゐざるをえない言葉は配分である。なぜ均等法則は棄てえないか。あるひは同じことだが、なぜ配分法則は棄てえないか。——答へていふ。それは眞正の、唯一の、均衡原理であり、そしていかなる理論經濟學も、こ

の均衡原理をすてて、全體系を支ふべき他の脊柱をいまだ發見してゐないからである！

すなはち客觀學派にせよ、主觀學派にせよ、その理論的體系が形成されるために不可缺の原理は、配分原理である。この原理をはなれて一つの靜態的體系が形成されたことは曾てなく、この原理を基礎とすることなくして一つの動態的體系が展開されたのを我等は曾て見たことがない。配分學說史はすなはちこの配分原理の發見、發展、再發見、再發展の歴史的舒適であり、その舒適の基調をなすものは、この原理にたいするもつとも廣汎なもつとも徹底的な綜合的理解でなければならぬであらう。しかり、それは綜合的な理解でなければならぬ。配分における客觀的な正常比例と、主觀的な限界均等とが、同時に二つのものとしてではなしに一つのものとして理解されなければならぬ。その理解は二つの理論を完全に一箇の體系として把握するものでなければならず、したがつてそれは究竟的には、さき的小篇『配分原理』（商學研究第七卷第一號）に示された一體系の正しき理解が前提されなければならぬといふことを意味するのである。

註 孤立人における時間配分の法則は、Marxによつて『資本論』第一卷第一章のなかで、簡潔に説明されてゐる。この説明を J. B. Clark の『分配論』第四章のなかの孤立人の勞働配分に關する説明と對照することは興味がある。――

「經濟學はロビンソン物語を好むから、こゝに先づロビンソンの島の生活を見よう。彼れは生れながらにして淡泊寡欲な男ではあるが、それでも様々な種類の欲望を満足せしめねばならぬ、そしてそのためには道具を作つたり、家具を製造したり、駱馬を馴らしたり、魚貝を採つたり、狩獵をしたりして、様々な種類の有用勞働をなさねばならぬ。祈禱その他これに類似なものは茲で問題とならぬ、なぜといふに、わがロビンソンはそれに怡樂を見出し、かゝる活動を氣晴しと

してゐるのだから。さて彼れは、彼れの生産的機能の種々雑多であるに拘らず、それらが同一なるロビンソンの異なれる活動形態に外ならず、従つて人間労働の異なれる仕方にも外ならぬことを、よく知つてゐる。必要そのものが彼れを強制して、彼れの時間を彼れの異なれる諸機能の間に正確に配分せしめる。彼れの總活動の中でどの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする効果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる。経験が彼れにそれを教へる、そしてわがロビンソンは、時計と臺帳とインキとペンとを難破船から救ひ出してゐたので、直ちに立派なイギリス人らしく自分自身のことについて簿記をつけはじめた。彼れの備品控帳には、彼れが所有する使用對象物や、それらの生産に必要な種々の仕事や、最後にこれらの種々なる生産物の一定分量の生産のため彼れが平均に必要なとする労働時間やの、明細書きが記入されてゐる。ロビンソンと彼れ自身の創つた富たる諸物品との間のすべての關係は、この場合極めて簡單明瞭であつて、ゲキルト氏ですら別に精神を勞することなくしてそれらを理解することができた。しかもなほこれらの諸關係のうちには、價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐるのである。

(三九) 第二版註。リカアドもまた彼れのロビンソン物語を有たないわけではなかつた。「彼れは原始時代の漁夫および獵夫をして、直ちに商品所有者として、魚および獵物をそれらの交換價値に對象化された労働時間の比で交換せしめてゐる。この際彼れは、原始時代の漁夫および獵夫をして、彼等の労働具の價値を計算するに當つて、一八一七年(リカアドの經濟原論の公けにされた年——譯者)ロンドン取引所において通用する年利表を斟酌せしむるといふ時代錯誤に陥つてゐる。「オウキン氏の平行四邊形」がアルジョアの社會形態以外に彼れの知つてゐた唯一の社會形態のやうに思はれる」。(カアル・マルクス著「經濟學批判」三三八、三九頁)。(今日の新版では四三頁、宮川の邦譯本では六七頁。なほリカアドについては堀經夫氏譯「リカアド經濟原論」三七頁以下参照。——譯者(岩波文庫「資本論」一一三—一二五)

Clark の『分配論』第四章のうち『一孤立人の労働は最終效用の法則によつて種々の仕事の間に割宛てられる』といふ小見出しの下にある部分は次ぎの通りである。ロビンソン物語をもつものは、Ricardo, Marx にとどまらず、新しい學派は擧つてこの物語を新しい様式で展開した。いはく『最終效用の法則は、……生産者が一生産物の創造を止めて他のものを作りはじめその點を決定する。貨幣をポケットにせる近世の労働者は、買物をするに最終效用の法則に相談し、そして既に手許にある諸の事物の供給をも考慮に入れて、各ダイム銀貨をそれが彼に最も利益を與へるであらうやうに費すのである。吾々の假定せる未開人は費すべきダイム（銀貨）は持たないで勞力を持つてゐる、そして彼はその勞力の費へる同一原則に従つて支配する。すなはち一事物に對する自分の欲望の鋭さを和けてしまふと、今度は他の事物を作るのである。故に市場並に價格は近世的現象であつて、その研究は斯學の普遍的眞理に獻げられる部門のうちには席を有しないが、近世市場において爲される購買を支配する最終效用の法則は、孤立人の生産をも支配するものであり、一の普遍的法則である。』（林要譯『分配論』五八―五九）

この兩者の場合において、孤立人を支配する配分法則の説明は、Marx の方が Clark に比してはるかに明快であり、且つ徹底してゐる。だが、不思議にも Marx 學者はこの一點を不問に附して今日に及び、また主觀學派の人々もこの一點に曾て注意したことはないやうである。兩學說を對照的に、しかも或る意味で綜合的に、取扱つてゐる新しい學者、たとへば Anom, Lederer 兩教授のつときも、この一點を出發點としてゐるのではない。この一點は看過された一點である。何人かが發見するのでなければ、經濟學の視野に入らずにゐるところの一點である。しかも一旦發見されれば再び見失はれることのない一點である。なぜならこの一點の把握はそれ自體新しき宏大なる展望を約束するからである。

第三 総合的な配分觀念の内容について

ありうべき配分學說史の一斑は、以上述べるごとき廣汎なものであるが、かかる學說史は総合的な配分觀念の確立並びにその今後の發展のために不可缺のものである。これは經濟學の領域において働くすべての人々が、『自己の以前に又は自己の傍において成就せられてゐることに留意せずに、自己の獨自の體系を建設する』ことに急ならんとする惡風潮に抗して、『各人が自己の以前にその分野において働いた人々の肩に乗り、又自己と同時にこの建物で働いてゐるすべての人々と手を伸べ合ふ』やうな研究態度を一齊に執ることの必要と、その正しさを立證するためにも、必要な仕事であるやうにおもはれる。この學說史的研究は、その根本態度において、箇別的な科學者の獨創性をそれ自體として評價することを排し、科學發達の全過程における繼續的な連鎖としてのみ諸學說を認容し、他の學說との内面的關聯性を探ることなくしてこれを學說史上に登場せしむべからざるものと規定するのである。またこの史的研究は、科學の進歩をもつて研究の協同性と繼承性との依存するものと認めるのみならず、それ自體ひとつの新しき聯環たらんことを期するものでなければならぬとおもふ。ここに改めて、配分學說史構成の嚮導概念ともいふべき総合的な配分觀念の内容を暫行的に決定しておくことが必要である。――

配分學說史は、經濟量配分の均衡に關する一切の思想を包括する。まづ第一にそれは均衡思想である。この均衡は、主觀的意識的乃至規範的なもの成果として説かれてゐても、客觀的無意識的乃至自然的なもの成果と

して説かれてゐても、——その甄別はこの研究にとつてもちろん重要であるが——それは均衡理論たるにおいて異なるところなきものと認める。第二にそれはかならず經濟量を前提する。經濟量とは經濟の對象たるべき何等かの物の量である。ここに經濟とは配分であり、したがつて經濟量は配分量である。(Deitzel の『節約原理』 Sparsprinzip, Cassel の『稀少性原理』 Prinzip der Knappheit および Deitzel の『節約原理』 Prinzip der Knappheit)より不完全なるより半面的なるより部分的なる認識にすぎないもののやうに見える。配分原理は、それ自體の理解のなかに、右にいふごとき諸原理が把握してゐるものを悉く包攝してゐるのに、右にいふごとき諸原理は、それ自體の理解のなかに、配分原理が把握してゐるものを包攝することができない。配分原理は第一に均衡の原理であるが、この均衡思想は、『節約原理』や『稀少性原理』そのもののなかに認めがたいのである。) もちろん經濟量は多種類である。およそ可分財は、理論上配分素材たりうるものである。米、小麥、鐵、石炭、綿布、砂糖等悉く經濟量であり、配分量たりうる。だが經濟量中比較的本原的なものは、總じて多様の用途をもつ原料品である。だが、より一層本原的なものは勞働である。だが最後のもつとも本原的なものは、人間の生活活動の先天的一制約たる時間である。時間は人間の總活動における第一次の配分素材であり、それこそはもつとも宏大な、しかしながら依然として限定された經濟量である。この見解は從來の經濟理論的思惟の限界を超える。だが本篇の筆者は、配分體系の第一次的展開として時間配分の原理を説くをもつて、理論經濟學の不可避的な根柢であると信じ、これを提言する。なほ貨幣および資本が今日の經濟においてもつとも一般的な配分素材であることはいふまでもない。第三に配分學説はかならずその適用の特定分野をもつ。その適用方向が供給理論な

ると需要理論なるとを問はない。またその適用範圍の狭小なると宏大なるとを問はない。またその適用が箇人の消費圈内の主觀的側面にあると、社會の客觀的な生産秩序の自然的調和の説明にあるとを問はない。その配分の説明が直接的に生産のみに屬すると、あるひは消費のみに屬するとを問はない。またその配分過程が、意識的、統制的、計劃的なると、無意識的、放任的、盲目的なると、問ふところではない。配分總量の想定があり、配分均衡の推理の存するかぎり、その理論の適用が奈邊にあるを問はず、またその説明が主觀主義的客觀主義的のいづれなるとを問はないのである。だが箇々の配分學説は事實上その特定の適用範圍をもつ。その適用が擴充されるにしたがひ、その體系は完成にむかつて接近する。——その適用のうち、社會の總勞働が生産の二大部門すなはち生産手段の生産と生活資料の生産とに配分されることに關係した一切の理論、並びにそれと關聯して箇人の消費經濟における所得配分の部分量が將來のために殘され、『待望』の對象となることに關係した一切の理論とは、當然配分學説史に攝取される。

綜合的な配分觀念の内容は、以上述べるところによつて要約しえたとおもふ。配分總量的前提があり、配分均衡の推理または想念の存するところ、そこに必ず存在するものは、配分原理である。極端に相對立する諸學者によつて打建てられ、發展せしめられた幾多の配分學説は、いかに互に無關係の外觀を呈してゐようとも、それらすべての理論的構成において内面的關聯性を有し、究竟的には同一原理の箇々別々の假設的表現にすぎないもののやうに見える。あるものは直接に箇人の内面からこれを把握し、あるものは直接に社會的生産の外面からこれを把握し、あるものは消費經濟の内部に、あるものは經營經濟の内部にこれを求める。その様相は實に雜多で

あり、ただあまりに雑多であるがために、今日まで曾て總括的な取扱ひをうけることができなかったのである。

右のうち、主觀學派に屬するものは、總じて箇人心理的な消費理論にその配分學説を建ててゐるの見解は、ややもすると不注意な人々から無雜作にうけとられやすいものであるが、かかる見解は決して正しいとはいひえない。主觀學説の創始者がその配分學説を生産理論のなかに適用したこと、たとへば W. S. Jevons が彼の配分學説を社會的生産における勞働配分に適用せんとしたことは、筆者が他の機會に指摘したとほりである。いないな、彼に先立つ約二十年、H. H. Gossen はすでに彼の最初の學理が、生産に適用さるべきものであることを明言した。わが日本においてこの一事をもつとも早く指摘し、我等の注意を喚起されたものは、福田徳三博士である。博士は當時その著書に Gossen の原文をも抄出して次ぎのごとく述べられた。——『吾人は茲に問題とするは、言ふ迄もなく、需要消費の問題にして、生産の問題にあらず。然れども限界利用均等の法則は、同じ前提の下には、生産にも行はる。ゴッセンは享樂資料に就て云ふのみならず、生産に就ても云ふこと、右第二段引照句の示す所の如し。』と。——主觀學派の學説創始者がいづれもその配分學説を生産に適用することを試みながら、しかもなほこの學派の全發展が消費理論の發展としての様相を呈してゐるところに、掩ふべからざる階級性が認められるのではあるまいか。

また主觀學派の配分學説は、總じて極大満足の觀念によつて、その合理性を明かにするのであるが、その嚮導觀念たる満足量は純粹に主觀的な分量である。この極大量が純粹に主觀的なものとして考へられるところに、また必ず考へられなければならないところに、眞に主觀主義的な立場の最後の根據がある。おもふにこの根據は奪ふ

べからざるものである。また客觀主義的な配分學說のうち、經營經濟の合理性を明かにするものは、その嚮導觀念として最大收益を思ふのであるが、この場合の極大量は主觀的な分量ではなくして、客觀的な收益の總量である。この思想はその論理的構成において Gossen 法則に酷似し、しかも Gossen より適に *an die von Thünen* にあるのであるまいか？ もしさうならば配分學說の嚮導觀念として極大量を思ふといふ方法は、その論理的構成において Gossen を嚆矢とすべからざるものである。

しかも猶ここに經營經濟と消費經濟とのいづれも箇人經濟的な配分論における根本的相異は、融和すべからざるまた融和せしむべからざる全く獨立した二つの根柢から生じたものであることを看過してはならない。すなはち兩者の論理的構成における酷似を明かにすることは必要ではあるが、この二つの經濟がよつてもつて立つところの根柢によつたはるものが、一つは收獲法則であり他は利用法則であることを看過してはならない。消費經濟において配分者の配分を指示するものは利用法則であるが、經營經濟において配分者の配分を指示するものは收獲法則である。利用はそれ自體主觀的な分量であり、收獲はそれ自體客觀的な分量である。ここに二つの配分理論が永久に箇々別々のまよにとどまるべき根據がある。これを何等か一つのものに融合しようとの無謀な試みがあるとするれば、それは利用法則と收獲法則との區別を否定する立場から出發するよりほかはない。眞の社會經濟の理論においては、この二つの配分理論は相互反照的に統一されることによつて社會的總配分の形成を説くべきものであり、この社會的配分の形成こそとりも直さず價格形成論の實體となるであらう。

遺憾ながら本篇の筆者は、配分學說史を書く準備において、あまりにみすばらしい状態におかれてある。筆者

はいまかかる仕事にとりかかるために必要な何等の準備をもちあはせてゐない。わづかに少數の文獻に親しみつつ、ありうべき配分學說史の全容をおぼろげに腦底にゑがきつつあるのみ。かくて現在できることは、そして今からとりかからねばならぬことは、すでに読み或は現に読みつつある内外の文獻に關して、まづ一々覺書をつくつておくことである。この覺書は、すでに一讀された箇々の文獻について、上來述べ來たつたやうな視點から選擇しえた部分にたいし、當座の解釋をほどこし、そしてそれが餘蘊なき他日の研究のために、ひとつの手がかりとなるもののやうに用意しなければならぬ。これはしたがつて、第一に簡人的な目的をもつて作成されるものではあるが、何等の客觀性がないわけではない。經濟學における配分觀念の無比の廣汎性にたいして、何等かの興味を催すであらう讀者にたいし、多少の意義を示すものでなければならぬ。のみならず配分觀念そのものの徹底的理解のためにも、これらの覺書はそれ自體、讀者にとつて若干の參考となるかも知れぬ。筆者はひそかにこの一事を期待せんと欲するものである。また筆者がすでに論文の形態において世に問ひつつある筆者自身の配分學說——たとへば『配分原理』『配分原理の擴充』等——において、説いてなほ盡さざる許多の部分にたいし、もしもこれらの覺書が註釋として役たつならば、望外の幸であるとおもふ。

本篇の筆者は、上述の目的から、今後幾年かに亘り、かかる形態の覺書を連續的につくつてゆく志をもつ。いま、かりにこの覺書の總括的な名稱を、表題のごとく配分學說史考と定める。——この覺書には順序も發展もない。或は von Thünen を、或は J. B. Clark を、或は R. Liefmann を、或は G. Cassel を擇み、しかも相互對照を敢て企てない。まづこゝでは第一に Karl Marx を擇む。おもふに Marx は配分學說史上もつとも偉大な

る學者の一人である。筆者は過ぐる年、大塚金之助教授との談論のあひだから、この示唆をうけた。もし教授の示唆によつて Marx を讀みはじめなかつたならば、筆者はおそらく配分學說に關して現に到達してゐるやうな學說史的な綜合的な取扱ひの可能を確信するために、もつと多くの歲月を要したであらう。

古典學派における配分觀念は、Marx に到つてはじめて徹底的な形態を執るに到り、爾來今日迄彼を超えてこれを發展せしめたものは存在しない。彼は客觀學派における最後の一人である。この最後の一人において配分觀念がいかなる形態を執つてゐるかを見ることは、客觀學派の全史における配分觀念の到達點を知るゆゑんである。すべてのものは、その發達の當初におけるよりも、その發達の最高段において、もつとも看易いものとなる。客觀學派における配分觀念もまたこの例に漏れないのである。Ricardo に於ける資本配分の原理は、ただ彼がそれひとつのみを研究對象としたところの資本主義經濟の現實的觀察から歸納したところの極めて平明にして簡單なものであるが、Marx に到つてこの原理がもつとも徹底的な、もつとも全幅的な形態をとりえたことはすでに一言したとほりである。かかる結果は、それが Ricardo 說の正統的發展なるがためといふよりも、Marx 自身の徹底的な社會的立場を思ふことによつてのみ理解さるべきものであらう。すなはち彼は資本主義的秩序の本質を理解するのに社會主義的秩序の理念をもつてこれに臨んだのであつて、彼の商品分析は、計劃的に統制的に行はるべき社會的總配分——社會的總勞働の生産總部門への配分における均衡——が、盲目的に作用する平均としてのみ到達される特殊なる生産形態の、内部關係すなはち交換關係を説明するために成立したものだといふも過言ではないであらう。

およそ配分觀念は、配分者たる意識主體が想定された場合においてもつとも把握され易いものである。このことは逆に社會的生產の計劃的統制を理念する者によつて、もつとも明確に打建てらるべき性質のものであることを語つてゐる。社會主義的經濟秩序の理論および實踐において、その意識的中心たらざるをえないものは、實に配分觀念である。社會主義聯邦が事實上 Marx の文獻をもつて學說史的存在としてかへりみなければならぬ場合にのぞみ、それ自體の新しき經濟理論をもたぬといふほど不思議なことはない。共產社會において一つの現實的な經濟理論の建築の必要が発見されるに至つたとき、かかる新建築の材料こそ、これを配分學說に、——就中主觀學派の配分學說（一）に、もとめざるをえないであらう。そもそも經濟生活に關するすべての思想のなかには二箇の理念がある。その一つは分配における正義である。この理念は極めて解り易く、從來多くの社會思想家によつて強調された。他の一つは配分における平衡である。この理念は經濟的厚生を内容とするものであるが、前者のごとく解し易きものではなく、事實においていまだ少數の思索者によつて——眞の科學者達によつて——理解されうるのみである。

おもふに分配における完全なる正義の實現は、それ自體のなかにいさかも完全なる經濟的厚生の實現を意味しうるものではない。分配における理想狀態は、同時に配分における最惡の狀態たることを得る。この事實のなかに、分配と配分との兩理念の完全なる分離がある。分配問題は、簡單にいへば社會的生產における各參與者が彼等の參與にたいし客觀的にいくばくの報酬額をうけるとるかの問題である。配分問題はこれに反して、かかる客觀的な報酬額が主觀的にいくばくの満足總量——主觀的な——を齎らしうるかにある。分配がたとひ倫理的に完

全な原理によつて遂行されることも、もつとも重要な社會的勞働の生産配分を謬つてゐる場合においては、各成員があたへらるる經濟的厚生はそれぞれ決して極大なるをえない。その極大がもたええられるのは、ただ配分における眞正の平衡があたへられたときのみである。このことの理解は、分配の正義に關する理解のごとく容易ではなく、十分綿密な分析的推理力を必要とするものであり、そしてこの問題に關する一般推理は主として主觀學説のなかにもとめることができる。正しき分配のもとにおいて、各人がそれぞれ正當に一定勞働時間量を内含する諸生産物の分配にあづかることができたとしても、その諸生産物の種類および分量上の比率如何によつて、満足總量は一々極端に相異せざるをえないのである。この事實のもつとも簡便な理解は、貨幣經濟の經驗に即するのがよい。いま一定時所において、一定貨幣額をもつて購ひうる商品の選擇の仕方、およびその購買配分比の種類は、無數にありと考へられるが、この無數の配分比はそれぞれ極端に相異する満足總量を意味するであらう。この事實こそ眞正の配分均衡すなはち經濟的厚生の極大量への理念を喚起せざるをえないのである。經濟的厚生の原理としての配分學説については、ここではこれ以上説明をすすめることをえない。配分觀念と分配觀念との全き相異を明かにすると同時に、現實的な社會主義秩序をもつて研究對象とする『經濟學原理』——それはまだ存在しないものである——が、經濟的厚生を内容とする配分觀念を排して他にその根柢をもとむべからざるゆゑんを示唆するにとどめる。この意味において、配分學説の向後の「發展は、いかに晚くとも必ずや社會主義聯邦の新しい科學者達のなかに期待せらるべきものであり、それがためには、Bukharinのごとき人よりは或る意味においてもつと Marx 經濟學の桎梏から逸脱した勇敢な決定的に大膽な眞の理論家の出現を俟つのはかなきものとお

もふ。

最後に配分學說史の研究と關聯して興趣深く顧みらるべきものに、勞働價值思想を根柢とする若干の社會主義的實驗並びに空想の歴史がある。Robert Owen の勞働交換銀行は右の實驗の一例であるが、これら實驗の失敗の意義こそは、とりも直さず配分觀念の重要性にたいする反省の喚起でなければならぬ。すなはち勞働價值思想を根柢とするすべての社會主義的空想並びに實驗の歴史は、わが配分學說史における一附隨的敘述として包括されるであらう。

なはこの雜考のなかに當然加はるべき Marshall の『原理』は、同一視點からするその比較的周到な批判的研究が、すでに本篇の筆者によつて別に發表されてゐるといふ事由によつて、このなから省略される。Marx の『資本論』、殊に商品分析の一章についてもさうである。この一章について、筆者は別に一篇の論文を書きあげた。その論文はこの雜考の發表よりややおくれて他に發表の機會をうる筈である。この雜考は現に發表された部分のみでは、むしろ緒言的なものが主體をなしてゐるが、この緒言的なものは右の一論文のために、もつとも直接的な序説の役割をなすであらう。と同時にこの一節に連續する二三の覺書並びにさらにその後に連續する澤山の未發表の覺書のために、共通の序説たる役割をなすであらう。もとより筆者の研究はわづかに出發點を確立したのにすぎない。綜合的な配分觀念の内容の決定については一層嚴密な吟味を必要とするであらう。その意味において、ここに述べるところのものはすべて暫行的ならざるをえない。諸學者の叱正を須たずしては眞に正しき一步をもすすみえざる思ひを禁じがたい。(一九二九年一月)

第四 マルクス『經濟學批判序説』並びに『經濟學批判』

第一篇に關する覺書

『此の譯書は Karl Marx の Zur Kritik der Politischen Ökonomie 1859 及び Einleitung zu einer Kritik der Politischen Ökonomie 1857 の全譯である。カウツキーの刊行本一九二二年版に依る。』(河上肇、岡宮川實譯新版序言) このうち『經濟學批判序説』の方は、一九〇二年マルクスの遺稿の中から、カウツキーによつて發見され、並々ならぬ苦心の結果、一般讀者が近づきうるやうな形にまでととのへられたものである。翌年彼の編輯するノイエツァイト誌上に發表され、同年ストーンの英譯本に採録された。(新版序言参照)

この譯本の冒頭におかれてゐる『經濟學批判序説』は、配分學説の發展史的見地から見て興味に充ちてゐる。マルクス一箇人の生涯においても、彼の思想には發展があり、そして配分觀念は後に至るほど明確となつた。右の一篇ではそれが明確でなく、分配の觀念とねぢれ合つてゐる。また經濟の本質に關する彼の見解は、ここではまた全く個人的世界すなはちロビンソンの世界の否定にとどまつてゐる。後に『資本論』では彼はロビンソン・クルーソーの孤立生活のなかに、すでに『價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐる』ことを發見し、それを説明するに至つた。これに反して一八五七年八月二三日と日附のあつたといふ右の一篇では、『社會の外部における孤立せる個人の生産といふことは、——それは稀には文明人が偶然に荒野に迷ひ込んだ場合に起り得るのである

が、かかる文明人は既に諸々の社會力を能動的(dynamisch)に有してゐる——共に生活し共に語る個人なくしての言語の發展といふに等しく、一の背理である。』と論じてゐる。すなはちはじめマルクスは、孤立人の自給的生產といふことは相手なき言葉といふにひとしく『一の背理』であると考へたものであり、この考は後に至つて彼自身によつて翻されたものと認めなければならぬ。價值關係の本質としての配分の觀念が明確となれば、それが最後に個人のなかに辿りうべきは自然の數であつて、マルクスにおける配分觀念は、『資本論』においてその正しい極點を示したのである。この見解はマルクス經濟學の現狀にたいして當分對立的のやうに見えるに相異ない。

『經濟學批判序説』第一節『生産一般』は右の視角から見て、第一に興味がある。なほこの一節には、總體としての社會的生產、全體の各部分としての生産諸部門の觀念が明かにされてゐる。『生産諸部門の大なり小なりの一つの總體のうちに活動してゐるのは、いつでも一の特定の社會體であり、一の社會的主體である。』——この客觀的な社會的な全體的なマルクスの見地は、配分觀念の成立に好箇の前提である。蓋し配分の觀念は、かならず配分主體、配分總量並びに配分諸部門の想定を含み、そして右の見地はそれを包攝するからである。

第二節『分配、交換、消費に對する生産の一般的關係』——これこそは興味の焦點である。配分觀念が分配の觀念とねぢれ合つてゐるといふのは、この一節である。——

『分配は、生産物が個人に歸屬する比例(分量)を決定する。交換は、個人が分配によつて割り當てられたる分け前を、如何なる生産物で要求するか、を決定する。』(一五頁)——ここに分配とは舊經濟學の四分法にいはゆる分配である。分配には必ず分配參與者の想定を含み、それは個人または階級である。(分配參與者の反面は、生

産參與者である。配分においては必ず配分諸部門の想定を含み、それは決して人間そのものではありえない。それは生産諸部門から然らずんば消費諸部門である。その根柢的なものはいふまでもなく欲望諸部門である。欲望諸部門が消費諸部門を構成し、消費諸部門が生産諸部門を構成する。別言すれば需要配分は供給配分を規定するのである。マルクスがここにいふ分配とは、各成員への總生産物の配當をいふのであることは明かである。次ぎに問題は交換である。『交換は、個人が分配によつて割り當てられたる分前を、如何なる生産物で要求するか、を決定する』とは、交換關係はすなはち配分關係の一現象形態であるといふことを示すものである。いかなる生産物で要求するかとは、割り當てられた總量（所得または分配分）をいかなる種類の生産物で要求するかとの意味であり、その意味のなかには、いかなる種類のものをいかなる比率において要求するかとの意味を含んでゐる。

右はマルクスが彼の時代の經濟學の構造——『生産、分配、交換、消費は一の規則正しき三段論法をなす』ところの構造——を批評した部分のなかの一節であるが、マルクスみづから交換を分配の次に説明するのは、個人の消費配分（『如何なる生産物で要求するか』を考へるがためである。蓋し個人の消費配分は、消費總量を前提し、彼の消費總量は彼の所得または分配分である。したがつて分配を前提せずに消費配分を考へることは一應不可能なのである。配分と分配との理論的關聯についての一層詳しい考察は、『資本論』中商品分析の部にゆづる。ここにもつとも興味あるものは次ぎの一節である。――

『最も淺薄なる見解においては、分配は生産物の分配として現れ、かくて生産とは遙かに離れたもの、生産に對して準獨立的なもの、として現れる。しかし分配はそれが生産物の分配である前に、第一には生産手段の分配で

あり、且つ第二には、更にこの同一の關係の別の規定たる、種々なる種類の生産への社會成員の分配（一定の生産關係のもとに個人を包攝すること）である。生産物の分配は、明かに、この分配——生産過程それ自體の内部に含まれ、生産の編制を規定するところのもの——の結果である。生産に含まるこの分配を無視して生産を考察することは、明かに空虚な抽象であると同時に、逆に生産物の分配は、本原的に生産の一要素を形成するところのこの分配に伴うて、おのづから定められるものである。（二八一—二九頁、傍點、圈點は大熊）

マルクスはここで明かに二つの點を指摘してゐる。第一の點は生産物の分配としての分配に先立ち、生産そのものにすら先立つて存在してゐる歴史的社會的分配關係である。生産そのものにすら先立つのであるから、それはむしろ『先經濟的事實』ともいふべきものであり、そしてしかもそれは生産を規定するのである。たとへば征服民族が土地を彼等のあひだに分配し、土地所有權の一定の分配と形態とを輸入することがとき、あるひは被征服者を奴隸となし、奴隸勞働を生産の基礎たらしめるごときである。あるひは一國民が革命によつて大土地所有權を破壊して、小土地所有權たらしめ、あるひは一國の立法が、大家族における土地所有權を永久化し、または勞働を世襲的特權として分配し、これを階級的に固定せしめるごときである。かかる分配關係は、全然生産の結果ではなくして、却て生産に先立ち、生産を規定するものである。マルクスはこの事實を指摘する。すなはちかかる分配は、生産物の純經濟的な自然法則的な分配（經濟學の四分法にはゆる分配）ではなくして、生産手段の原始的な分配である。

第二の點はやはり生産物の分配としての分配に先立ち、生産そのものに内在してゐるところの一種の分配關係

である。マルクスにしたがへば、この分配關係は『種々なる種類の生産への社會成員の分配』である。しからばこれこそは社會の總勞働の生産諸部門への分配を意味するのであつて、我等はこの關係を二つの分配（生産に先立つ生産手段の分配と生産の結果としての生産物の分配との二つ）から截然區別し、分配關係と呼ぶのである。

なぜなら分配關係はそれ自體を遊離せしめて考察しうる性質のものであり、その遊離法は全體の關係を一層明確に把握する科學的方法だからである。分配關係はあたへられたる條件のもとにおいて、一つの自然法則にしたがふ。そしてその自然法則は、生産物の分配を支配する諸法則から一應獨立して考へらるべきものである。

マルクスによれば、『分配はそれが生産物の分配である前に、第一には、生産手段の分配であり、且つ第二には、更にこの同一の關係の別の規定たる』分配であるといふことになるのであるが、分配をもつて先經濟的分配（生産手段の分配）關係の『別の規定』であるとしたのは、全然分析の放棄である。マルクスはここで分配法則から完全に遊離せしむべき配分法則を發見してゐない。配分關係はそれが生産物（所得）の分配關係を前提し、生産物の分配關係は生産手段の分配狀態を前提するといふ意味において、畢竟生産手段の分配狀態によつて規定される。『社會成員』が『種々なる種類の生産』へいかなる比率において配分さるべきかの問題（このなかには社會的にいかなる生産物が生産されうべきかの問題を含む）の決定は、理論的説明の上では生産の結果としての分配が前提されなければならないのである。なぜなら社會的總勞働の産業總部門への配分は、社會的に決定するとしても、その社會的決定なるものは個人的な所得の消費配分の總和以外の何ものでもないからである。したがつてマルクスがここで次のやうにいふのは、それが配分關係に關するかぎり正しいといふことをえない。——『生産物の分配は、明

かに、この分配（生産手段の分配状態と社會的總労働の配分關係を意味する、大熊）——生産過程それ自體の内部に含まれ、生産の編制を規定するところのもの——の結果（一）である。』

もし生産手段の分配關係のみについていふならば、生産物の分配はその先經濟的分配の『結果』であるといふのはよい。だが配分關係に至つては決して生産物分配の原因たるものではなく、むしろかかる分配關係を前提するものである。だから配分關係が『生産過程それ自體の内部に含まれ、生産の編制を規定する』といふのは正しく、また『生産に含まるこの分配』（生産手段の分配状態と社會的總労働の配分關係を意味する、我等はここでは後者に焦點を置いて論ずるのである。大熊）を無視して生産を考察することは、明かに空虚な抽象である』といふのも正しい。だが『生産物の分配は、本原的に生産の一要素を形成するところの此の分配（同上、大熊）に伴うておのづから定められるものである』といふのは、明かに謬つてゐる。

この場合のマルクスの謬りは、要するに『先經濟的事實』たる生産手段の分配と、社會的總労働の配分關係（これには明白な自然法則のあることをマルクスは後に至つて發見した）とを同一事物の二面でもあるかのやうに取扱つたことに歸する。だが我等の興味は、マルクスがすでにここで、配分關係をもつて生産關係に内在するものとして考へてゐるといふ一點にあつまるのである。生産手段の分配状態と労働配分の關係とを密着せしめたのは確に混同であり、また彼がみづから『最も淺薄なる見解』と稱したところの生産の結果としての生産物の分配なる觀念を、やはり棄てえずして、それが生産手段の分配状態並びに労働配分に『伴うて、おのづから定められるものである』としたのは錯倒である。生産も配分も分配も消費も一如として把握されぬかぎり社會經濟の本

質は理解するをえない。配分は生産物(得所)の分配を前提し、その分配は生産を前提する。しかるに生産はすでに配分を内含せずしては考ふべくもないといふところに、これらのものの相關關係がある。かかる相關關係から獨立してこれらの關係に先立ち、その前提をなすものは、ひとり生産手段の分配狀態のみでなければならぬ。

次ぎにこの書物の看過すべからざる箇處は、第一篇第一章の末段についてある『商品分析に關する學說史』である。この學說史こそ直ちにもつてわが配分學說史の第一部門たらしむるに足るものであり、マルクスはここで、ペティ、ボアギルベール、フランクリン、スチュアート、スミス、リカアド、シスモンディの七人を取扱つてゐる。我等自身の目的のために今いかなる文獻を涉獵すべきかは、この簡單な學史が無上の手引である。――

『商品を分析して二重の形態の勞働に歸せしめること、即ち使用價值を現實の勞働或は合目的な生産的活動に歸せしめ、交換價值を勞働時間或は等一なる社會的勞働に歸せしむることは、古典經濟學――イギリスに於てはキリアム・ペティに、フランスに於てはボアギルベールに始まり、イギリスに於てはリカアドに、フランスに於てはシスモンディに終りし古典經濟學――の一世紀半以上に亘れる諸研究の批判に依つて得らるる終局的結果である。』――これがマルクスの冒頭であるが、ここで取りあえず我等のなしうることは、マルクス自身が固有の目的をもつてしたこの小學說史を通して、我等自身の目的がどの程度に達せられるであらうかを試みることである。

ペティは『現實の勞働をば直ちにその社會的總姿容に於て、即ち分業として理解した。』(五一頁)彼は『アダム・スミスの製造についてしたやうに、懷中時計の製造について、分業が生産に齎らす利益を示してゐるばかりでなく、同時にまた一の都市、一の國全體を一大なる工場として考察することにより、分業が生産に齎ら

す利益を示してゐる。』(五三頁)だが生産能率の視點からする分業論は、配分學說と直接には無關係である。必要なのは社會的生産における總勞働の配分の具體的様相を説くものとしての分業論である。『あらゆる特殊なる生産的業務の總體(Totalität)としての分業は、素材的方面より見たる、即ち、使用價值を生産する勞働として考察したる、社會的勞働の總體的姿容である。』(四九〇)——このマルクスの見地こそ配分學說と直接關係をもつ。ペティにおいて、分業論と價值論とがどの邊まで内的關聯性をたどりうるか、たどりえないかは、直接彼の著書について研究するほかはない。また彼の勞働價值説がその理論の前提として、どれほどまで配分關係を明かに示してゐるかわらないかも、彼の著作について直接研究するほかはない。マルクスによつて舉げられた彼の著書。——

1. Sir William Petty, Essay concerning the multiplication of mankind, etc., 3rd edition, 1686.

2. „ Political Arithmetick, etc, London, 1699.

次ぎにボアギルベール。——彼は『無意識にはあるが、事實上商品の交換價值を勞働時間に分解した、蓋し彼は、個人の勞働時間が特殊なる諸産業部門に正しき比例に於て配分されることによつて、「眞實の價值」(La juste valeur)は定まる、となし、自由競争をばこの正しき比例を創り出す社會的過程なりと説いたからである。』(五五一五六頁、傍點圍點は大熊)ボアギルベールに關するマルクスのこの紹述は、筆者を驚倒せしめるに足る。配分學說史上、まづもつとも燦然たる光彩を放つもの、あるひはペティではなくして、佛蘭西ルキ十四世の一經理官ボアギルベールではあるまいか。彼はルキの經理官でありながら『鋭き思索力及び精神力をもつて、被壓迫階級の味方をした』といはれてゐる。右の短い一節は、明かに彼が交換關係の本質を把握してゐることを示すものであ

る。——自由競争による勞働配分の正常均衡、その均衡を前提とする價值關係の正常狀態の理論が、彼によつて明快に說かれてゐるものやうに見える。配分の『正しき比例』とは正常配分比を意味し、正常配分比の狀態はとりもなほさず正常配分均衡の狀態に外ならない。ボアギルベールはいみじくも配分均衡の意識的前提のもとに彼の價值説をうちたてたものと見える。配分學說史の最初の頁にベティを失ふとも、ボアギルベールを失ふべからずとおもはれる所以はここにある。マルクスによつて擧げられた彼の著書。——

1. Boisguillebert, Dissertation sur la nature de la richesse, etc. (千七百九年不明)

次ぎにフランクリンを論じたところで、マルクスが次ぎのやうに言つてゐるのが眼にとまる。——『重農學派にとつても、その論敵にとつても同様に、焦眉の問題は、如何なる勞働が價值を創造するかといふ事ではなくて、如何なる勞働が剩餘價值を創造するかといふ事であつた。だから彼等は問題をばそのエレメント的形態に於て解決しないうちに、その複雑なる形態に於て論じたのである。これ總ての科學の歴史的過程が多くの交叉し逆行せる經路を経て、始めてその眞實の出發點に至るのと同じことである。』なぜこの言葉が眼にとまるかといふに、この言葉は配分學說に關するかぎり、マルクスもまた『問題をばそのエレメント的形態に於て解決しないうちに、その複雑なる形態に於て論じた』一人であるといふことを想起せしめるからである。總じて『資本論』の冒頭商品論の理解の困難は、著者がその配分觀念を眞先に『エレメント的形態』において説くことなしに、——すなはちまづ商品の秘密と幻術との只中に讀者をおいて、思ふ存分彼等をまごはすといふところからくる。さうして散々讀者をくるしめた揚句、『商品世界のすべての神秘、すべての魔法妖術は、吾々が他の生産諸形態（それは畢竟他の配分諸

形態といふことだ。大熊に逃避するや否や、直ちに消滅するのである。』といふ。それからすぐにマルクスのロビンソン物語がはじまるのである。だからもしも『資本論』の冒頭が配分觀念の『エレメントの形態』たるロビンソン物語からはじめられてゐたならば、そしてロビンソンの時間配分における均衡性を理解してゐたならば、讀者は眞先にすべての生産形態に通ずる一般的法則（配分法則）を理解することができ、そして商品社會におけるその法則の現象形態は交換價值であるといふことを理解するのに何等の困難をも感じないであらう。——だがさうすると、むしろ資本主義社會の一種の合理性と秩序性が強く讀者に印象して、マルクスの所則に反するやうな結果を惹起しないともかぎらない。それはともかく商品分析の主たる目的は『價值』をこはして商品生産社會における配分關係を理解するにあるといふも差支なく、その配分關係の『エレメントの形態』をまづロビンソンの時間配分のなかに理解するならば、讀者は『その複雑なる形態に於て』論じられた商品論を容易に通過しうるに相異ないと思ふのである。この點についてさらに詳しくは『資本論』中商品分析の箇處に、すなはち本篇と前後して發表される他の論稿の方に、ゆづらなければならぬ。ここではマルクスにおける配分原理が主題である。

註 本篇の第一、第二節には、東京朝日新聞昭和三年十二月二十四日から同二十九日に亘つて連載された小篇『配分と分配』の内容と往々重複する部分がある。筆者がこの重複を避けなかつたのは、右の小篇こそ本篇のテッサンに外ならぬがためである。